

保育手段としてのお話（一）

——講演の梗概筆記——

序

これから保育手段としてのお話に就て御一緒に研究する。しかし、幼稚園の教育が、お話でなければならぬと云ふのではありません、製作に就いて話した時には恰も製作でなければならぬやうに製作に就いて力説致しましたがそれだからと云て保育が製作に明けて製作に暮れなければならぬものではないかもしれません。お話に就ても同様です。幼稚園の教育が一方に、偏すと云ふ事は喜ばしくないのであります、或一事が園の傾向になり其事に就て得意を以て誇るといふ事は幼稚園の教育では邪道であります、保育手段によつて其園が型作られて行くと云ふ事は避けべき事でありませう。特色を問はれても答へる事の出来ない。（其は何もして居ないので答へられないのではないかもしれませんが）、あれもこれも爲て居て、何れと

云て取り立てられない幼稚園の教育が良いのであります、それですから、お話は、幼稚園の中心でもなく、全體でもありません。或は又他の教育説の様に之が私の殊に主張する幼稚園の教育と云ふのもありません。之れは誤解のない様に願います。

第一 保育手段としての

お話の本質及價值

お話の定義、お話といふ言葉はいろ／＼の場合に使はれますが、保育の手段として茲でいふお話は、お話そのものが主になつて居るお話であります。即ち吾々が日常使ふ所謂用談、實際上或目的を達する爲

倉 橋 惣 三 述

の one の方法に使はれる話、或は閑談。人あり、人ありて互に語りたから語る、お茶を飲みながら四方山の話をする或は議論の爲の議論と云ふ様なもの、など、區別して置きます。其のものが純粹に主になつて居るものを一般に藝術的だとすれば、こゝに云ふ、お話は即ち藝術的なものであります。

お話の起源。そこで、斯ういふ純粹なお話は、どうして出来たか。即ち、幼稚園で私共がお話を用ふるといふ問題の前に、人類所有品としての、お話は一體どうして出来たものかと云ふ事を考へて見る必要があります、それには人間文化の發達を逆昇て、吾々の文化の根源たる原始人に就て尋ねて見るのが一番いいのであります。そうすると、原始人は吃度次の様に答へます。『吾々の持つて居るお話は天から與へられたのだ。』と扱て此天からあたへられたと云ふ答を其まゝ心理的に解剖すれば、語らざるを得ざるの心理状態に他なりません。その腹ふくれざるを得ずして語たお話を、敬虔な原始人は自分の話、人間の話とはしないで天から聞いた、ものだと云ふのであります、而して此のざるを得ざる、内からの心持の強さは實に吾々の計り知られないものであります、し

かもあの眞純なる原始人の生活は悉く此のざるを得ざるの生活であつたのであります。

扱て原始人のざるを得ざる、事の形式に三つあります。其の一つは舞踊であります。嬉しくてたまらなくなり、而白くてたまらなくなり踊らざるを得ずして踊るのであります、悲しみも喜びも總ての感激を頭だけで處理して居る文明人に比して原始人は身體全體で生きて居ます、原始人の感激は身體全體のものであります。次は歌謡であります。

本來は舞踊歌謡は多くの場合結び附いたものであります。然し、あの沈み行く日を見ながらうつむいて、岩に腰かけ、悲しみの餘り訴へる様な場合の原始人の哀歌は、舞踊に對してはよほど獨立性を持つて居ます、私は之を舞踊から獨立させて考へたいと思ひます、第三は即ちお話であります。舞踊を喜びながら、歌謡を悲しびからの、ざるを得ざるの表現生活として、此處に驚き、怖れ、憧憬、といふ様な場合其時は踊りも出来ず歌ひも出来ず、身體も心も固く小さく緊縮してしまふ事があります。そこで、この驚嘆にうたれた人は一散に自らをかかえて逃げ歸るか、又は驚きの餘り其場で氣絶して仕舞ます。暫く

して吾に歸た時、後から、實に後から、其過ぎた怖さを、物語るのであります。ですから、原始人の話は皆驚きの調子を主として居ます原始人の「自然神話」でも「英雄談」でも、つまり自然界に對する驚きと、自分達の群を抜いた強い人間に對する驚きとに他なりません。從來歌謠舞踊に對してその眞純な原始性に於て多少違つたものとされておりましたお話は、かうした見方から、前二者と肩を並べた同じ性質のものになります。

話し手と聞き手。 扱てお話には必ず、話し手、と聞き手、と二つがありますが、彼の氣絶したほど驚いた話し手の話を、聞き手も矢張り同じ様な強さに驚いて聴くものとしたら、聞き手は話し手に、もう止めてくれ、と云ふに違ひありません（怖さに堪へきれないで）。然し聞き手は話し手程に驚いては居ないのであります。聞き手は怖さに息がつまつて氣絶しはしない。寧ろ其怖いのを樂しむと云ふ餘裕があるのです。話し手に取ては實に事實であつたのが、聴き手にとつては翫賞となるのであります。詳しくいへば、其處には怖さを聞いて樂まふとする一種の遊戲的欲求があつて、その欲求にぶつかつて來る處の

満足が味はれるのであります。原始人の話し手と、聞き手との間に此の差があり、そして此聞き手の心持が今日の幼兒に於て同じ様に存するのであります之が幼兒教育に保育手段として、お話、が用ひられる一つの理由であります。

お話の形式的價值、 お話の保育手段としての形式的價值は味はふといふ事にあります。味ふといふ生活は自ら製作してゆく生活の様に、次から次へと忙しく働いてゆくではありません。人生には作り、作り、作つてゆく季節的な態度が極く必要であることはいふ迄ありません。しかも、靜に、しんみりと、ものを味つてゆく、落ちついた態度も是非ほしものである。餘りに作業本位、製作本位のみになりますと、此の方面の教育が缺けないとも限りません。そこへ、繪を見るとか、お話を聞くとかいふ保育手段が、必要になるのであります。

お話の内容的價值、 原始のお話の内容は分化せざる形に於ての話し手の科學觀哲學觀道德觀宗教觀、が混然として入居るのであります。處が理智な文明人が冷靜になつて驚くといふ感じのなくなる處に科學、哲學、道德、宗教、が分化して來るのであ

ります。お話は分化しない處に講釋も説教も、及ばぬ實に他を以て代へがたき價値があるのであります、而るを今日の吾々はこの科學、哲學、道德、宗教をよそにして外に一つの話、即ち童話を作らうとするのであります。然しお話の本質は、内容としての本質は、話し手がお話そのものをする事に依て、其人の科學觀、哲學觀、道德觀、宗教觀を語るものであり、聞き手も亦青年期に入て學校などで聞くのとは違ひ混然たる形ではあるが、其不分化狀態に於てやはり哲學を科學を道德を宗教をうけるのであります。即ちお話は、不分化狀態に於て話し手の科學觀、哲學觀、道德觀、宗教觀を與へるのであります。

お話は決して、にはか芝居ぢやありません、ふざけではありません、笑談ぢやありません、お話には云ふに云はれぬ嚴肅さと深さが含まれてあります、幼稚園は修身を修身とし道德を道德として語りたくありません、然しお話の中には之等のものが潤澤にくまれて居るのであります。あの哲學を哲學とし、科學を科學とし道德を道德とし、宗教を宗教として話すのは分化を欲する話し手の自己徹底に外ならぬのであります。

第二 お話の心理的内容

これまでは保育の手段として、お話そのものに就ての研究でありましたが、之れから、お話を聞いて居る子供の心理的内容がどういふ風になつて居るか云ふことを考へて見ませう。簡單にいへば、お話はつまり子供にとつて其の想像作用、を刺戟して來るのであります、そんなら子供の想像はどういふものかを考へて見ねばなりません。

1、再生的な問題。お話を聞く時の子供の想像は智的に解釋すれば一種の再生作用が盛に起つて居るのであります。現在生活ではなくして嘗て見嘗て聞いたものが出て來るのであります。たとへば甲の話を三度聞くと致します。すると甲(二)の場合には甲(一)を再生し甲(三)の場合には甲(一)と甲(二)とを再生するのであります、然し此處に初めて聞く乙と云ふ話があるとなります。すると、之は出しぬけに與へられる様であります、然し之も一種の再生的聞き方をせられるのであります。それは乙と云ふ新しい全體ではなく乙を組み立て、居る部分々々がやつばし子供の心に再生して居るのであります。子供にとつ

てまるで新しいお話をする時、そんな事があるのかといふ風に聞いてゐる様に見える子供の心は、矢張り再生で落ちつき、又まとまつて來るのであります。此意味に於て、話して居る人の話と聞て居る方の話とは必しも同じでないかもしれません。私が話して居る事は確かに受け取られては行きますが、子供自身の持つてゐるものを再生して聞いて居るのでありますから、私の話として聞いて行くか、又はまるで違つた其子自身の再生として異つた形で聞いて行か嚴密には分らないことです。お話を擇ぶのに子供の年齢に依てするといふことは確に大切な注意ですが、又一方から見ればどんな話でも子供には相當に受け取られて行くのであります、それは子供に自分勝手な再生を持つて聞くからであります。兄弟して聞く話は同じ一つの話であつても、兄は兄の持つて居る再生で、弟は弟の持つて居る再生で別様に聞くのであります。新しいお話は子供が消化するのには相當に骨が折れます、其れは自分の持つて居るものの再生に骨が折れるのであります。話し手の想像作用に依て話が作られると云ふ事はいふまでもない事でありますが、聞き手も亦想像作用に依て聞くのであります。お話が

時間と空間を越超してゐると云ふのも此の爲です。つまりお話の世界では時間の長さ(數量形態も)極めて判然限られないのであります。大入道の大きさは唯大きいと云ふ事を自分相當な再生で考へる丈で誰も其大きい數量を知てゐる者はありません。故に大入道は無限に大きく成る事が出来るのであります。私共より無量に大きく再生し得る子供に取ては其數量の知られない處に非常な面白みがあるのであります。私共の話が其まま受け取られず違て聞かれると云ふ事は、何だか情無い感じが致しますが、子供は私共よりもつと面白くして(想像で)聞いてくれるといふ點に於て、又喜ぶ事も出來ます。

一體此の頃のお話は餘りに細く記述し過てゐます其は私の、自分の考へて居るものだけを子供に制限して與へると云ふ事になります、たとへば大入道は屋根より大きいと云ひますと、屋根よりと云ふ話し手の小さい記述に依て己に大きさを制限されてしまふのであります。

□、欲求的な問題、更に之を、情意的の方面から見ますと、欲求的と云ふ事になります。子供が存分に自由に想像をして來ますのは刺戟に依て次へくと

欲求が出て益々強くなるのであります。たとへば桃太郎の話をするにしましても知的には、桃太郎の着物や刀を再生しても情意的には、力が強いとか偉いとか云ふ事から桃太郎をして斯うさせたい、勝たせたい、その次はかう、と欲求に欲求を以て聞く子供は、その心は實に急がしいのであります。(芝居を見る時に次の幕をかくあらせたいと思ふ成人の心持は即ちお話を聞いて居る幼児の欲求と同じであります。其故お話の途中でポーズ(これは仕方の時に又申します。一寸言葉を切つて休むのです。)をしたあと、それが長いと子供は「それからどうしたの」と聞きまゝす。其心持の中にはかくあればいい、かくあつて欲しいと云ふ強い欲求があるので單にどうなるかと云ふ期待だけではありません。かやうに過去を再生し次を欲求して聞いてゐる聞き手は恐らく、話し手よりも急がしく心を働かせて聞いて居るのであります。普通の心理學では想像を構成、受動の二つに分けます。畫方の想像は構成的であり、畫の夢の状態の想像は受動的でありますが、お話の場合の想像は、この兩者を含むのであります。發動的で受動的な一種特別なる心理状態が現れて來るのであります。形

から見ると話手が働き、聞き手は受取手の様に見えますが、しかし聞き手はこの絶え間ない欲求に依て決して單純なる受身の場合ではありません。この意味に於て話し手は聞かせ手ではなく想像を起させる道具だともいへるのであります。

第三、お話の撰擇

一體幼稚園で保育と云ふものが保姆と子供との間にはさまつてあるのではありません、或考へ方で行きますと特に教育の爲に或目的を考へますが、私の云ふのはさうではありません、保姆は自分といふものの中で保育をしたいのであります、それは、あなたは自分の愛する子供をどう育てるかといふ事は、あなたは自分がどうならうとするのかといふ事と同じなのであります。教育は其人から流れて來るのであります、保育を行ふ爲に保姆が雇はれてゐるのではありません、教育は教育者自らを除て外にはありません、もし園長が其園へ初めて來た保姆に、どうか此園にお出の間は云云にしてみたい、と云ふことは云ふべくして行はれません、それでは教育の力はなくなつてしまひます、あなたがいいと思

ふ處を、あなたの趣味あなたの主義、あなたの教育を與へて下さい、と云ふのが力強い教育であります。自分に托された子供を自分にとつてかくありたしと思ふ事より外につれて行く道はありません。かくも大膽であれと云ふよりは、眞實であれ、あなた自らに眞實であれと云ふより外に出来ません。さうする事に依てのみ教育が可能であります。教育者をはなれて教育はありません、もしあれば其は空論であります。そこでお話の擇び方に就ても、私はやつぱし自己に忠實なれと云ひます、自分の趣味に合する事自分の面白いと思ふ以外に擇ぶものはありません。

イ、自分から見た擇び方 實際お話は、本質や撰擇をどうかと云ふのではありません、實際問題として一番大切なのは仕方であります、しかしするとすれば、まづどれをするか、何をするかといふ處へ來ます。それは自分の一部分が語られる様な話をするより外にありません、總て教育者と子供との問題は與へ方であり、例令は心理學者として、玩具屋として、は玩具の研究もしませうが、教育者としては玩具は受持の問題であります。お話も同様です。

ブライアントがあつた「三の豚」のお話がいゝと云

ひました。あの人がいゝと云たから自分もするのぢやだめです。それでは話としてはよくても教育としては死ぬのであります。自分から見た擇び方、これは樂の様で實際はこれできめて行くのは骨が折れます。話の本質は始は自己の經驗（驚）を語てゐるのであります、吾々は此處に於てどこまで話し手が其話の中には入てゐるか云ふ事が問題であります。外の世界には外にたよるものがありませうが、お話といふ藝術の世界では自己にたよるより外にはありません、と同時に自己に眞實でない話はしないのであります。

ロ、幼兒の方から見た擇び方、 之れは次の二ツになります。

(一) 子供が再生し易い様な再生要素の澤山ある話、同じ話をくりかへす事もよし、新らしくても子供に再生の樂くに出来る話がいゝのであります。かねて子供の持つてゐる處の、子供の觀念、子供の感情が其話に依て容易にくりかへさるるのが必要であります。

(二) 子供の欲求を促すもの。自分の趣味に合するからとて全然子供と無關係なものではだめです。

お話は是非子供の情意生活にあてはまらなければなりません。

ハ、本質から見た擇び方、では、出来るだけ、お話の本質に合したものでかいと思ひます。

或時代に於て、お話は智的にどこまでも訓育的に有益に／＼と偏する傾向がありました次には其反動として、有益といふよりも心のほどける爲といふことを主にしました。

近頃では後者の方が尊重せられて居ます。一體此頃の多く話される話に二種あります。それは、無意味話（イノセントストーリー）及び理科物語であります。軽い、一寸した可笑しみといった様な生活に幼児を入れるのも、科學々々で現實感に入れるのも大に結構な事です、かういふ事の外にお話の本質に屬して、お話でなければあてられないのは、驚き、此世には驚くべきものがある、怖れ、この世には怖るべきものがある。憧憬、この世には憧憬すべきものがある、と云ふ感じであります。

精確と説明を主にする理科と、軽い長閑な息ひの生活の外に、其外に驚嘆、崇敬、嚴肅の生活も何となく養て置きたいものであります。

今の幼稚園ではこの深み奥行が最も缺けて居ります、お婆さんが語る鎮守の森の話は、お婆さん自らが其處に驚きと怖れ、憧憬を持って居りますから、それをきく子供には何となくそれが感じられるのです。そういう風なのが、今日の教育のお話には極く少い。

〇お隣の秀子ちゃんは

お誕生を過ぎた許りの秀子ちゃん

ふち／＼あるいてバタリとたはれ。

『居ない／＼』『バーア』が大お好で

障子のうしろに廻つては『バーア、』

お母さんの背にうづめた顔をあげては『バーア、』

お店の用事奥の用事なか／＼忙しむ母さんは

『ねんねんやう』を朝の中から寝かしつけても

れるのが嫌ひの秀子ちゃんは

すぐ眼がさめて匍ひ出して立ち上る

『もう目がさめて、秀子ちゃん、母ちゃん御用が出来ません

好い兒だも少しねんねんやう』

云はれるそばから秀子ちゃんは

母さんの背に乗つて『バーア、』

お店に行けばふち／＼と

帳場の臺に匍ひのほり

足をなげ出し坐り込んで

父さんの顔のぞいて『バーア、』